

「底が突き抜けた」時代の歩き方⁴⁷²

< 1968年 > が1970年代の中で消失していく

「1968年」は百花繚^{りょうらん}乱の年であった。新年早々から前年の羽田闘争に続くエンタープライズ寄港阻止闘争が起き、学生たちの熱気とうねりの波は三里塚闘争や王子野戦病院反対闘争から神田カルチエ・ラタン闘争、国際反戦デー・新宿騒乱事件へと及んでいく一方で、学生たちが拠点とする大学「内」では、国公立大学の頂点に位置する東大と、最大の学生数を擁する私立のマンモス大学である日大で、全国の大学での一斉蜂起を促すような闘争を無期限の様相で打ち上げていた。アメリカが介在するベトナム戦争と中国の文化大革命が拡大しつづけるなか、国外の大学においても、フランスのパリ大学ナンテール分校での闘争を引き金とする、「想像力が権力を奪う」というスローガンを掲げた「パリ5月革命」が勃発し、アメリカでは「いちご白書」で有名なコロンビア大学での闘争が、全米に学園闘争を波及させていった。ほとんど知られていないが、メキシコ五輪を控えたメキシコにおいても、学生たちが発砲する暴力的な警察機動隊と衝突する闘争が繰りひろげられた。

20年後の「ベルリンの壁」崩壊を契機に、一気に突き進んだ東欧共産圏・ソ連邦解体を遠く予見させていたようにみえる、チェコの「プラハの春」をめぐるソ連など5ヵ国軍によるチェコ侵攻という事件が生起して、世界中の人々を震撼させたのもこの年であった。アメリカでは65年のマルコム X 暗殺に続く、黒人指導者のマーチン・ルーサー・キング牧師暗殺も起こって、米国各地で黒人の暴動が発生し、「銃をとって米国の人種差別主義者と戦おう」と呼びかける「ブラック・パワー」が押し上げられていった。黒人指導者暗殺だけでなく、二ヵ月後には63年のケネディ大統領暗殺に続く、弟の大統領選の民主党候補ロバート・ケネディ上院議員暗殺も起こり、ベトナム戦争で荒廃しつづけるアメリカ社会の病理が大きく浮き彫りにされていた。

日本国内では、「人質」事件を引き起こして自分の主張をメディアを介して訴えかけるという、初の劇場型犯罪ともみられる金嬉老事件や、電車で時限爆弾をセットして爆発させる事件の走りともいえる横須賀線爆破事件や、「無知の涙」で知られる永山則夫の連続射殺魔事件も噴出している。そういえば、「1968年」という年は明治100年目にあたり、近代化を推し進めた果ての一切の問題が噴出している観があった。近代化達成の最終章における上層部に位置づけられる学生の反乱と、最下層でのさまざまな「無知の涙」事件として概観されるが、「1968年」は1月9日の円谷幸吉の自殺としても幕を開いている。東京オリンピックマラソンの銅メダリストとして、この年のメ

キシコ五輪マラソンにも期待がかけられる重圧のなかで、「父上様、母上様、幸吉はもうすっかり疲れ切ってしまって走れません。何卒お許し下さい。気が休まる事なく、御苦労、御心配をお掛け致し申し訳ありません。幸吉は父母上様の側で暮しとうございました」という遺書を残した自殺は、近代化達成の目標のなかで、絵に描いたような申し分のない秩序関係を維持していた日本の「最後の家族」の場所が崩れ去っている様を映しだしているように見える。

その１９日後には「おわびの入水自殺」と題される出来事が『毎日ムック 戦後５０年』（毎日新聞社）に取り上げられている。そこにはこう記されている。

《１／２８、奈良県大和郡山市通称下池で４４歳母と７３歳祖母が腰ひもで体をしばり合って入水自殺。昨年９月長男の工員Ａ（１９）が国道２４号でコツコツ貯金した金で手に入れた小型乗用車でわき見運転しセンターラインを越えモーターバイクと衝突、運転者（２８）といとこ（３２）の２人が即死、後ろから来た被害者弟（２６）のバイクも倒れ片目失明。母とＡの各月収は１万５０００円で、強制保険６００万円のほかに月額１万５０００円で８年払い計１４４万円を申し出たが、被害者側は月額３万円を要求、話がこじれた。遺書には「大切な息子さんの命を奪い、ほんとうに申し訳ございませんでした。なにひとつさせていただけず、ただ、口ですみません、すみませんといっぱかりですからみなさまのお心もおさまらぬことと思います。鬼や畜生とも思われましたでしょう。でも私にはもうどうにもできません。卑きょうとは思いますが、死んでおわびをいたします。私ぐらいが死んでなにになるかとおしかりのことと思いますが、私のせめてもの気持ちです...」とあった。２４日に母と祖母は家出していた。》

日常的にごくありふれた事故をめぐる痛ましい出来事であるが、「戦後５０年」のなかで特筆されなければならないほどのニュースとも思われなない。当時どれほど話題になったのか、こちらの記憶にはないし、知ることもできないが、むしろ編集者が数多くの事件のなかからピックアップしていることに驚く。「１９６８年」という非常に騒々しい、世界史的な大事件が頻発するなかで、我々のごく身近な日常生活ではこんな胸を打つ遺書を残して命を絶っていく悲劇もあったんだよ、と注意を促してくれているような気もする。「１９６８年」とは誰の記憶にも残るような世界史的な大事件のための年だけではなく、いつの時代であろうともその底には、社会の片隅でひっそりと起こってすぐに忘れ去られていく痛ましい出来事が集積して流れていることへのまなざしが、歴史認識には不可欠であることを改めて思い起こしてくれるのだ。

この母親の遺書には、円谷幸吉の遺書の内容と相通ずる哀調が感じられる。それだけではない。彼が自殺寸前まで自分の兄弟や親族、とりわけ両親に対する申し訳なさの念で溢れ返っていたように、母親の遺書にも被害者に対する申し訳なさの気持ちが満ちている。そこに恨み言の調子は一つも見られない。「死んでお詫びする」という心情が貫かれている。この心情は「１９７２年」の連合赤軍事件で、赤軍派最高幹部の坂東国男の

父親（５１）が、逮捕直前に「世間を騒がせたことを死んでおわびする」との遺書を残して、首吊り自殺を行った出来事にも脈々と連なっている。肅然と自殺にむかって人生が閉じられていくあり方は日本人の美学に適っているけれども、そこにどうしても「世間」の壁が大きく立ち塞がっているように見える、その目にみえない暴力に対しても、学生たちは石を投げ、角材を振りまわしていたのである。

自殺についていえば、前年のエスペランチスト由比忠之進の、ヴェトナム戦争に対する日本の首相の姿勢に抗議する焼身自殺が起こっており、その憤死ともいべき火の玉自殺は「１９７０年」の三島由紀夫の割腹自殺につながっている。１９６８年という時代は自殺のあり方においても、「お詫び死」と「憤死」の両極端を垣間見せており、学生たちの闘争は「お詫び死」にも「憤死」にも行き着かない生き様を模索していたといえる。しかし、なぜ「大学闘争」であったのか、という本質的な問いにむかって学生たちが石を投げ、角材を振りまわしているわけではなかったことが、闘争を全国化させ長期化させていたにもかかわらず、永續化させる運動の視点との交差を妨げていたのである。いいかえると、学生たちが大学を高等な労働力の商品育成工場としてののみ位置づけ、人類の発生以降累積されてきた「知」の階層的な内蔵場所としての「大学」という幻想領域に、自分たちが踏み込んでいることの意味を学生たちが追求することが、闘争として自己組織化されていくというように「大学闘争」が展開されなかったために、「大学闘争」は見かけ上の派手な実力闘争に収斂^{しゅうれん}してしまったのだ。この問題はより一層、「１９６８年」にむかって影を投げかけていく。

《前年に引き続いて、１９６９年の世界は荒れていた。あるいは、騒がしかった。新しくアメリカの大統領に就任したリチャード・ニクソンは、こじれたヴェトナム戦争を打開するため、「北爆の強化」を打ち出した。「アメリカが勝てば、ヴェトナム戦争は終わる」－アメリカの単純な大統領はそう考えた。後になってはとても通用しない強引な“打開策”だが、この時代の社会を管理する者達にとって、困難な事態を打開する最大の方法は、「力による問題の排除」だった。

１９６９年１月１８日、東大の安田講堂を占拠していた学生達は、機動隊によって排除された。荒廃した東京大学は、「入試中止」というペナルティを政府によって受けた。日本中の大学で、校舎を占拠する学生達が機動隊によって追われた。１９６９年の日本は、学生運動が収束に向かって行く年でもあるのだが、根本を無視した「力による問題の排除」が“根本的な解決”となるわけではない。だからこそ、管理者側の力によって“問題”を排除された世界は、これから何年かの間、「豊かさ」という仮の収束へ向かいながら、騒がしい痙攣状態を見せることになる。

１９６９年に排除される学生達は、「ノンセクト・ラジカル」を旗印にした学生達で、彼等は各大学に「全学共闘会議」という形で結集していた。つまり「全共闘」である。全共闘が学生運動の中心勢力となった時、学生達は既成の左翼運動から決別したも同然

だった。だから、１９６０年代末期の日本には、へんなことが起こる。左翼思想によって生まれたはずの学生運動が、１９６０年代の終わりには、既成の左翼を敵とし、心情的には右翼へと接近してしまうのだ。学生運動とヤクザ映画のブームは、そのようにして両立した。「ノンセクト・ラジカル」とは、いずれの既成のセクトにも属さず – つまりは、いずれの既成のセクトに対しても疑問を感じ、ただ「ラジカル」であることを求めるということである。「ラジカル」が「根源的」であるのか、ただ「過激」であるのかは、混沌の中で大きく揺らぐけれども、「ノンセクト・ラジカル」を掲げてしまった者に味方はない。結局のところ「ノンセクト・ラジカル」とは、「集団」とはなりえず、「個」として散開して行くしかないものだからである。

１９６９年の９月、大学の外に出ざるをえなかった「ノンセクト・ラジカル」の学生達は、東京で「全国全共闘連合」を結成した。「ノンセクト」であるはずのものが、一つの「セクト」を作る – それは矛盾で、だからこそ「全国全共闘連合」は、全共闘というセクトの始まりではなく、終わりにしかならない。「終わりにしかならない」という事実を認めにくい者達が、「終わらせてはならない」という願望の下で、一つに結集した。つまり「全国全共闘連合の結成」というのは、学生運動を戦った若者達にとっての、散開の式典だったということである。おそらく、当事者達にその自覚は薄かっただろうけれども。

その年の秋になれば、過激化した学生運動の中に「手製爆弾」も登場する。１１月には大菩薩峠で「武闘訓練」をしていた赤軍派が逮捕される。１９７０年代の前半に赤軍派はさまざまな騒ぎを起こすが、それとは無関係に、時代は豊かに、平和になって行った。騒ぎを生む「問題」と共に排除されて行った者達は、そのまま浮上しない。どうしてかと言えば、排除された「問題」の中に、再浮上に必要な「新しい思想」が宿らなかったからである。つまり、１９６９年とは、それ以前の時代を引っ張って来た「思想」が終焉を迎える年なのだ。だからこそ騒がしく、その後には空疎なる「豊かさ」しかもたらさない。

１９６９年、日本の学生達の多くは、既成の左翼思想に背を向けていた。社会主義国家の中国では、自己破壊的な文化大革命が続行中だったし、前年にチェコのプラハを戦車で制圧しなければならなかったソ連も、同盟国である東欧諸国に離反の機運を生んでいた。社会主義思想の主導権争いから、１９５９年の段階でもう決裂が歴然となっていた中国とソ連は、１９６９年になってウスリー河の中洲で武力衝突を起こした。左翼思想は壁にぶつかっている。第二次世界大戦以後の基本となっていたソ連対アメリカの冷戦構造はそのままだったが、しかし世界は、もう冷戦以後の「地域紛争の時代」へと突入し始めていた。

ヴェトナム戦争を「社会主義と自由主義の対決」と信じていたのは、アメリカ人のすべてではない。だからこそ、アメリカでは本格的な反戦運動が起こっている。１９６７

年の4月、アメリカ各地から集まった30万人がニューヨークへの平和行進をした。訴えるものは「反戦」であり「愛と平和」である。^{ラブ・アンド・ピース}。ベトナムで無意味な戦いを続けることによって、アメリカの自由主義思想も壁にぶつかり、ここからヒッピーの文化が生まれる。しかし、1967年に生まれたヒッピーの思想さえも、ドラッグに足を取られ、1969年には壁にぶつかっている。改造バイクでアメリカ大陸を放浪する自由なヒッピーの若者二人が、保守的なアメリカの村人たちに惨殺されてしまう映画『イージー・ライダー』は、この年に公開される。アメリカ犯罪史上に名を残す狂信者チャールズ・マンソンが、ヒッピーでもあるような信者の若者達と映画女優シャロン・テイトを惨殺してしまうのが、1969年の8月。同じ月には、40万人の若者を集めたロックコンサート「ウッドストック」が開かれる。「平和と音楽の3日間」は「伝説」となった。しかし、その30周年を記念して開かれた1999年の「ウッドストック」は、暴動の場だった。思想を欠落させたその後の時代に、かつての伝説はもう蘇らない。

1969年はまた、人類が月への第一歩を刻んだ年でもある。この年の7月20日、アメリカの宇宙船アポロ11号は月面に着陸した。1957年にソ連が世界初の人工衛星を打ち上げてから12年、ソ連のガガーリン少佐が地球を一周した1961年の8年後だが、しかし月面に着陸した人類は、その後の20世紀の30年間、その先へ一歩も進めなかった。この時点で、誰がそんなことを考えただろう。月に第一歩を記した人類はやがて火星に至り、その後もどんどん宇宙への進出を果たして行くのだと思われていた。しかし人類は月で止まった。NASAの目的は「月まで」だった。進歩をうながす「科学」という思想さえも、ここで終わった。

1969年に、「思想」はその役割を終えた。「思想」は「豊かさ」を作り、その豊かさの中で「思想」は不必要になった。1970年から始まるのは、「思想」を必要としない「大衆の時代」なのである。時代の中で生まれた「思想」は、まだ続く時間の中で古くなり、時代というものに追い越されていった。それを自覚しない「思想」の信奉者は痙攣し、その責任と役割を「大衆」にバトンタッチした「思想」は、ゆっくりと終焉を迎えて行く。》

橋本治によれば、1969年の世界は「力による問題の排除」が強行されることによって荒れていたし、騒がしかったことになる。「力による問題の排除」とは、力によってしか問題の解決はありえないとみなされているということである。もちろん、それは「問題の解決」どころか、「問題の排除」にほかならない。では、解決されることなく、排除されていく「問題」はどこへ行くのか。「問題」はどこにも行かずに、各人の中に、各人の関係の中にヘドロのように沈潜して行くだけである。学生たちのバリストは問題の噴出のあらわしかたであって、したがって、「力による問題の排除」は学生と共に問題を排除することによって、ますます問題に問題を積み重ねていき、排除に排除を積み重ねるだけのことであった。排除された学生たちが二度と結集して起ち上がらなかった

のは、起ち上がることができなかったのは、機動隊の力によっては排除することのできない「問題」を占拠することに失敗したからにほかならない。

なぜ失敗したのかといえば、機動隊の力に排除されない「問題」があることに気づかなかったからだ。「全共闘」運動がどの既成のセクトにも属さない「ノンセクト・ラジカル」を標榜しただけで、そのことの本質的な意味を展開しなかったのは、自分たちの「ラジカル」さが自分たちの心情の激越さではなく、自分たちの手にしている問題が「根源的」であるが故に「過激」であるという意味で、「ラジカル」であるということに全く思いが及ばなかったからである。自分の問題と相手の問題を情況にむかって「共闘」させていくという視点を欠くことによって、佇んだままの「全共闘」運動は限界を突破するための「全国全共闘連合」結成を、橋本治がいうように、逆に終着点にしてしまったのだ。「全共闘」運動の終焉は「手製爆弾」の登場であり、石を投げ、角材を振りまわす行動スタイルの学生運動を、「武闘訓練」技術を磨くスタイルの学生運動へ転換させていくことになった。

「手製爆弾」の登場や「武闘訓練」行動はいうまでもなく、既成の左翼運動における「いつか来た道」であって、そこに「新しさ」は皆無であった。根源的で過激な「問題」を掴み取る力量の無さを、「手製爆弾」や「武闘訓練」で埋めようとする激越な心情がそこに認められるだけであった。1960年代の学生運動が既成の左翼思想に背を向ける、ニューレフトの運動を目指していたのであれば、石を投げ、角材を振りまわす行動スタイルの「新しさ」は、別の行動スタイルの「新しさ」を喚び込まねばならないのであって、既成の左翼運動のかつてのスタイルにほかならない「手製爆弾」や「武闘訓練」に行き着くのであれば、それは先祖返り以外のなにものでもなかった。《つまり、1969年とは、それ以前の時代を引っ張って来た「思想」が終焉を迎える年なのだ。だからこそ騒がしく、その後には空疎なる「豊かさ」しかもたらさない。》

「1969年」の8月に40万人の若者を集めて開催された“伝説”のロックコンサート「ウッドストック」の《30周年を記念して開かれた1999年の「ウッドストック」は、暴動の場だった》ように、《改造バイクでアメリカ大陸を放浪する自由なヒッピーの若者二人が、保守的なアメリカの村人達に惨殺されてしまう映画『イージー・ライダー』の35年後のアメリカもまた、なんら変わらない。《ベトナムで無意味な戦いを続ける》当時のアメリカに、イラクで無意味な戦いを続ける今のアメリカが置き換わっただけであり、ヒッピーの文化を生み出した反戦集会や、「愛と平和」^{ラブ・アンド・ピース}を掲げたニューヨークへの平和行進を支持基盤とするジョン・ケリーは大統領選で、『イージー・ライダー』でヒッピーの若者二人を嘲笑しながら撃ち殺す保守的なアメリカの村人たちを支持基盤とするジョージ・H・W・ブッシュに敗れ、《ベトナムで無意味な戦いを続ける》アメリカが甦っているのである。

《1969年はまた、人類が月への第一歩を刻んだ年でもある。》つまり、こういうこ

とだ。人類が月への第一歩を刻んだ「１９６９年」とは、また「月への第一歩」が新たな地球への第一歩となることを全く予見させることのなかった年であった。いいかえると、「月への第一歩」という宇宙への進出は人類が地球の隅々にまで侵略し尽くした果ての、という水準にすぎず、地球に最も身近な異星から改めて地球という惑星を眺める「まなざし」を獲得するには至らなかった。「月への第一歩」という事実と、そこにまで到達した科学技術の成果が軍事技術として存分に活用されていく課題だけが残ったのである。《人類は月で止まった》ことで、《進歩をうながす「科学」という思想さえも、ここで終わった》というよりも、なんの見返りもないまま、月の向こうの宇宙にまで進出する経済的、科学的な「無駄」や「冒険」を、アメリカという超大国は許容しなかったということである。

《１９６９年に、「思想」はその役割を終えた》のではなく、橋本治もいうように、「１９６９年」まで時代を引っ張って来た「思想」では、「１９６９年」以降を生きることができなくなったということだ。要するに、次の「思想」はまだみえないままである。

《１９７０年から始まるのは、「思想」を必要としない「大衆の時代」なのである》という指摘から、古びた「思想」を必要としない「大衆の時代」から生み出される新しい「思想」の産声を聞き取る必要があるが、その声はまだどこからも聞こえてこない、ということなのだ。《「思想」は「豊かさ」を作り、その豊かさの中で「思想」は不必要になった》とき、「豊かさ」が空っぽの廃墟に包まれていることを誰もがひそかに感じ取っていた。「１９７０年」は１９６９年以降の「思想」を見出せないまま、「豊かさ」の廃墟の中を歩いて行くのである。

《１９７０年は、大阪万博の年である。

１９６４年の東京オリンピックが終わると、「大阪に万国博の誘致を」の声が上がった。「万博を呼んで大阪にも東京並の経済復興を」である。１９６４年以前、「東京オリンピックを無事に開催出来るのか？」と多くの日本人はドキドキした。しかしそれが大成功に終わった後は、もう遠慮がない。高度成長の道を邁進する日本人は、呼べるものならなんでも外国から呼ぶようになる。

大阪万博のこの年には、ハリウッドのスター、チャールズ・ブロンソンを起用した男性化粧品「マンダム」のＣＭが大ヒットした。その後の日本のテレビでは、オードリー・ヘプバーンやカトリーヌ・ドヌーヴやアラン・ドロンのＣＭを実演する。大阪万博では、アポロ１１号の持ち帰った「月の石」が展示され、これを見るために日本人は長い列を作った。１９７２年には、札幌に冬季オリンピックが呼ばれる。１９７４年には、ルーヴル美術館からモナリザの絵が運ばれて、これを見るためだけに１５０万人の日本人が並んだ。１９８０年代になれば日本各地に「地方博」は花盛りになるが、その下地はこの年に作られた。日本は遂に「繁栄の時代」へと突入したのである。

大阪万博がスタートした３月１４日から１７日目の３月３１日には、よど号のハイジ

ヤック事件が起きる。犯人は赤軍派の学生達で、彼等は北朝鮮へ行った。11月25日には、東京市ヶ谷の自衛隊駐屯地に作家の三島由紀夫が私設の軍隊「楯の会」の会員と共に侵入、自衛隊員に「決起」を呼びかけて自決した。「思想」が終焉した繁栄の日本から、極左の学生も極右の作家も去って行った。

終焉と言えば、よど号事件の10日後、ビートルズが『レット・イット・ビー』を最後に解散した。1962年にデビューした時、ジョン・レノンは21歳、解散時には29歳だった。20代の若者に8年の時間が与えられたら、もう若者ではなくなる。しかし、ビートルズ解散の理由は、彼等が若くなくなったからでも、人気なくなったからでもない。原因はメンバーの仲違い。解散しても、ビートルズのメンバーはそれぞれの活動を続け、その意味でビートルズは、変わらずに健在だった。

ビートルズにとって、あまり年齢は意味がない。ビートルズが登場するまで、若者は「大人」になるものだったが、ビートルズが登場してからの若者は、「大人」にならない。若者は、ただ「若者としての時期」を終え、それまでの「大人」とは違う、なにが別のものになる。

1962年にビートルズをデビューさせたイギリスは、1965年にマリー・クワントのミニスカートを生んだ。その時マリー・クワントは21歳。斜陽大国イギリスの1960年代を支えた二大功績者は、マリー・クワントとビートルズである。ビートルズとマリー・クワントは、音楽とファッションをビッグ・ビジネスにした。20世紀の世界に資本主義という繁栄の基軸をもたらし大英帝国は、そのビジネスの質をさっさと変えていたのだが、しかしそのミニスカートも、1969年を最後に終焉の時を迎える。1970年以後のファッションは、マキシ丈のスカートであり、パンタロンであり、ホットパンツになった。しかし、ビートルズ解散後も音楽がビッグ・ビジネスであり続けたように、ミニスカートがはやらなくなった後でも、「若者ファッション」は健在だった。

しかし、ビッグ・ビジネスとなった音楽もファッションも、やがては保守化してしまう。ミニスカートという極端を生んだ若者ファッションは、やがて「ニュートラ」という穏健化をへて、ブランド志向の1980年代へ至る。ビートルズが登場した時、大人達は「うるさい騒音」と言ったが、ビッグ・ビジネスとなった音楽は、もうそのような非難を浴びなかった。音楽もファッションも、企業社会を成り立たせる一要素となって、その時には、「思想」という違和感が排除されている。

ビートルズが解散した年の秋には、アメリカで二人のビッグ・スターが死ぬ。1960年代末期のアメリカ若者文化を作ったロック・ミュージシャン、ジミ・ヘンドリックスとジャニス・ジョプリンである。ジミ・ヘンドリックスは「変死体」で発見された。ジャニス・ジョプリンはヘロインによるショック死である。サイケデリック時代のスターは、彼等にふさわしい死に方をした。過激なものは、その過激さに殉じて自ら消えて

行った。

1960年代の終わりに、終焉を迎えつつあった「思想」は、若者にその役割をゆだねようとした。若者達は「思想」を体現しようとして、しかし、その若者達も消えて行く。「思想」が終焉を迎える世界に浮上するものは、新しい「問題」である。一つは女性問題であり、もう一つは公害だった。

1970年8月のアメリカでは、女性参政権獲得50周年を記念する集会が各地で開かれた。前年の8月はウッドストック、この年のアメリカは女性解放のデモ行進である。女性運動を導く有力な著書もベストセラーになる。日本の10月21日は、初のウーマンリブの集会である。前年には手製爆弾も登場した国際反戦デーのこの日、日本のウーマンリブは産声を上げる。人類の半数を占める女性のあり方が「思想」にはならず「問題」のままであるというのはへんだが、「男の作る社会に女が問題を提起する」という形が崩れるまで、女性問題は「人類の思想」とはならない。その点で、「被害を国に認めさせる」という形で繰り広げられる公害闘争と、女性問題は同じなのである。

公害の登場は、1970年以前である。1963年には、熊本県で発生した水俣病の原因が、新日本窒素水俣工場から排出された有機水銀であることが言われ始め、1967年には、三重県四日市の石油コンビナートからの大気汚染による四日市ぜんそくが、公害訴訟を起こしている。1969年には石牟礼道子の書いた『苦海浄土 - わが水俣病』がベストセラーになり、社会の矛盾を体現するような公害への認識が広まった。1970年は、「スモン病」よ呼ばれた奇病が、実は整腸剤キノホルムによる薬害であることが報告された年であり、東京杉並区の住宅街に光化学スモッグという新種の公害が現れる年でもある。

公害のその初めは「企業害」であって、企業とその後ろ盾になる国は、因果関係を認めない。しかし公害は、企業と国家権力が「悪」であるということから始まって、やがては、文明社会・市民社会のあり方そのものが大気汚染・水質汚染を生むということへ進む。20世紀後半の世界に住む人間が等しく被害者となり加害者になりうるところで、公害問題は、人間のあり方を考え直させる女性問題と同じなのである。

「思想」は消え、そして、解決を求める「問題」が新たに浮上する - 1970年はそんな年である。》

「思想」が終焉していく繁栄の日本から「世界革命」の根拠地を求めて飛び立った、よど号ハイジャック犯の赤軍派の学生たちに対する関心は、橋本治にはほとんどない。彼らは去って行った存在であるから、二度と我々の前に浮上することがない。だから橋本治は言及しない。彼のスタンスは別におかしくはない。ただし、「拉致問題」が起こるまでは、だ。橋本治が「1970年」について記述しているときは、まだ「拉致問題」が浮上していなかったし、よど号の学生たちが「拉致問題」に関与している疑惑は取り沙汰されていなかったの、彼にとってよど号ハイジャック事件は、大阪万博やビート

ルズの解散や女性問題、公害などと肩を並べるくらいの大きな比重を占めていなかった。だが、もし彼が「拉致問題」以降に「１９７０年」に記述していたら、よど号事件を大きく取り上げざるをえなかったと思われる。

「拉致問題」が日本や韓国に「革命」を引き起こすために、工作員養成という目的の下に計画されたものであったなら、よど号の赤軍派がその計画に加わっていたことは大いに考えられる。彼らは観光目的ではなく、「革命」目的のために北朝鮮入りしたのであるから、「拉致問題」が「革命」目的と直結していたなら、彼らが主導的に関与していない筈がなかった。現に帰国している彼らの元妻の一人は、自分を含めて彼らが計画の実行犯であることを証言している。橋本治がいうように、よど号事件は「思想」としても「問題」としても消えた筈であったのに、３０年後に「拉致問題」のかたちをとって再び浮上してくるようになったのである。《「思想」が終焉を迎える世界に浮上するものは、新しい「問題」である》としても、沈潜している「問題」はいつ、どのようなかたちをとって噴出するに至るかはわからない。よど号事件が３０年後に「拉致問題」のかたちをとって浮上したとき、改めてよど号事件のみならず、それに至る６０年代の学生運動や社会背景について振り返ってみることを要請されずにはおかなくなる。「１９７０年」には『いちご白書』と共に、『俺たちに明日はない』や『イージー・ライダー』に続く、アメリカン・ニュー・シネマの『明日に向かって撃て』（ジョージ・ロイ・ヒル監督）が公開される。追い詰められた二人の銀行強盗、ポール・ニューマンとロバート・レッドフォードが、メキシコ警察の包囲の中を死を覚悟して突入していくラストシーンが非常に印象的であったが、この映画の「明日に向かって撃て」とは対照的に、よど号の学生たちは、「我々は「あしたのジョー」である」と誇らしげに言い放って、北朝鮮に駆け込んだのである。「明日に向かって撃つ」絶壁と切断された彼らの「あした」に易々と身を委ねていく脳天気さは、金日成・金正日親子に取り込まれるなかで、３０年後の「拉致問題」を目指していたという以外にない。

大阪万博から始まる日本の「繁栄の時代」は、「思想」が排除されていく「空虚な時代」の始まりでもあった。割腹自決に至った三島由紀夫の「決起」は、到来しつつある「空虚な時代」に向かったの「決起」でもあり、７０年以降の自分は「空虚」な存在としてしか存在しえないことを見通した上での割腹自決にほかならなかった。ジミ・ヘンドリックスやジャニス・ジョプリンの死に方も、「空虚な時代」にふさわしい空虚な死に方であったかもしれない。６０年代末に「思想」を体現していた若者たちが消えて行けば、新たに浮上するのは、女性問題であり、公害問題であると、橋本治は指摘する。「空虚な時代」に剥き出されてくるのは、それまで置き去りにされてきた生き難さであり、ずっと我慢をしいられてきた女性たちや、企業の害毒を身に浴びせられてきた公害患者たちが、ようやく声を上げる機会が巡ってきたということだ。

２００５年３月２１日記